国際演劇交流セミナー 2016

International Theater Exchange Seminar 2016

ごあいさつ

一般社団法人日本演出者協会 理事長
流山児祥

1990 年代より近隣の韓国、中国の演劇人との交流、さらには東アジアの国々との演劇交流を日本演出者協会は重ねてきました。また、1999 年からは文化庁による本格助成のもと『国際演劇交流セミナー』を通年で開催するようになり、世界各国の演劇人を講師として、ワークショップ、レクチャー、シンポジウム、リーディング等を連続的に開催しています。
『国際演劇交流セミナー』は、前理事長和田喜夫（当時事務局長）と一緒に立ち上げ、現在まで 17 年間開催されている協会のメイン事業の 1 つです。この事業を立ち上げた動機は「世界の同時代演劇をもっと知りたい」というわたしたち演劇人の根源的な衝動からでした。世界の《身近な他者》との「出会い」を求めて始めた事業です。

『国際演劇交流セミナー』は 17 年間にわたって韓国、中国、台湾、アジアの国々、カナダ、オーストラリア、東欧、北欧、アフリカといった 60 か国以上の国々の演劇人と交流し深く学ぶ機会を継続中です。当初から欧米中心の企画ではなく、日本で余り知られていない様々な国々との交流・紹介を目指しました。なぜなら、世界には多様な演劇が存在しているからです。世界の多様な「現在」を、演劇を通して知り他者と交流する、それが『国際演劇セミナー』なのです。

これで 140 回 60 か国近い国の演劇人との『国際演劇交流セミナー』を実施したことになります。招聘した講師の多くは各国の優れた劇作家、演出家、俳優、舞台美術家、演劇教育者などです。そんな演劇人の言葉がずっしり詰まった 201 6 年度の年艦です。この年鑑が、日本の演劇人にとって素敵な「世界」との「出会いの書」になれば幸いです。

すぐ隣の国にいる《身近な他者》との出会いの中に演劇は豊かに存在しています。パレスチナの友人が語るように「演劇は社会にとって必要不可欠なモノ」なのです。そんな《身近な他者》の熱いメッセージをあなたに届けます。世界には、いろんな演劇があるのです。この年鑑で「いろんな演劇」との素敵な出会いがあなたに生まれることを願っています。ありがとう！

マ カ オ 特 集

【INTRODUCTION】

演出家のためのワークショップ！ with マカオ
事件から想像し、創造する六日間

企画：佐川大輔

マカオは、中国の統治下でありながら、自治権を得ており、中国の共産主義支配への抵抗運動が起こり、民主化の波に揺れている。芸術的にも中国本土のような検閲はない。また、1999 年までポルトガル統治下の名残もあるうえ、インターネット規制もないため、世界基準の視点を持っている。が、現在、マカオ自治政府は本土のいいなり状態ということで、現地市民はジレンマを抱えている。

たまたま私がマカオに滞在した 2014 年は、天安門事件から 4 半世紀の記念の年であり、多くの演劇人がこのテーマの作品を上演していた。ご存知の通り、かの事件は中国の歴史では「存在していない」ことになっている。しかし、天安門事件当時にポルトガル統治下にあったマカオ市民は、我々日本人と同じようにテレビ中継を見ており、民族の同胞が戦車に曳かれていったのを知っている。この状況は歪であるが、彼らはそれを演劇として表現している。

「自主規制」という空気が、真綿のように表現者を締め付けだしている最近の日本であるが、中国でも、欧米でもないグレーゾーンなマカオの人々が「母国中国」を演劇で批判するときの方法はどのようなものだろうか？また、「実際の事件を演劇に扱う姿勢や作劇術」というものがどのようなものか？このブレインストーミングの過程を通し、見えてくるのではないかと考えたのが、企画動機である。

「演劇人の閉鎖性」というのは、日本の構造的な問題と思われる。理由の一つとしては、小劇場においては、「作家兼演出家」という「個人的才能」に依存している団体が多いからだろう。だが、大きなプロジェクトになればなるほど、関わる専門家も増え、協働する範囲も増えていく。つまり将来活躍するためには、「共有する」という集団創作の基本的なコミュニケーションスキルが、演出家には必要不可欠になっていくはずだ。我々はもっと他者とシェアするスキルを積極的に磨いていくべきだろうが、現場でそれを実地訓練することは難しい。講師から演劇スキルを学ぶワークショップのほうが、学びが多いように感じるかもしれないが、それらの「講座型」では得られないことが、ブレインストーミングワークショップでは多く、非常に意義深いと考えている。

過去は課題戯曲を設定したブレインストーミングワークショップであった。その長所は脚本分析力や読解力、構想力を磨くという部分だろう。しかし、同時に「この戯曲をどう読むか？」に議論の焦点が絞られすぎる傾向もあった。

「実際の事件を扱う」という設定は、いわば自由課題である。題材を自分で選ぶ。しかし、その題材はリアルな事件となると、必然「この事件をなぜ扱いたいか？」という個人的なモチベーションがそこに見えてくる。それは簡単には言葉では説明できないものであり、そういう根源的なものこそが、ブレインストーミングで他者と共有する価値のある課題と思った。今回の 6 日間で、各参加者は「自らの演劇観」や「表現者としての根源」に触れる作業をしただろう。そのため、多くの上演プランが身を切るような切実さと言語化できない魅力を感じさせた。

個人的にこの「事件を元にしたブレインストーミング」企画は非常に発展性を感じており、今後も機会があれば、ぜひ続けていきたいし、多くの演出家の方に参加してほしいと考えている

「 札幌担当の感想 」

実行委員　前田 透

札幌という地域では演出家に向けてのワークショップの開催というものが、1 年に 1 回か 2 回、そもそもあるかないか、という状況である。北海道全体でいっても 5 回も行かないだろう。そうした環境の中で行われた国際演劇交流セミナーのマカオ特集は、札幌の中でも大いに珍しがられた。

演出家以外にも、普段俳優として活動している参加者もおり、また、会場であるレッドベリースタジオの支配人の飯塚優子女史にも最終日の発表を観ていただき、また札幌で開催してほしい、とラブコールをいただいた。参加者からの評判も良好であり、札幌初の国際部の企画としては良いスタートを切れた。とは思うが、惜しむらくは、参加者が少なかった、ということと、年齢層に偏りがあった事である。

企画を通して、海外の演出家と議論を交わしたり、シーンを作ったり、という作業はなんといっても面白い経験だ。演劇に国境はないのだ、と。一つ、言語の問題はあるにせよ、その言語の壁を乗り越えることすらも、ある種演劇の一部なのだ、とそう感じながら 6 日間を過ごしていた。講師のフィリップと札幌の参加者とでマカオの演劇事情を聞き、また札幌の状況を話していくうちに、国際交流と銘打っているが、都合よく拡大解釈してしまうと「マカオ」と「札幌」という地域間交流のような雰囲気で行われたセミナーだったようにも思える。さらに、そこに、東京から来た実行委員も含めれば、「マカオ」「札幌」「東京」という三都市での交流ともなるわけなのだから、なんとも贅沢である。

国際演劇交流セミナーは、演出家としての経験の場に加え、他の地域との交流も果たせた。大変お得な機会である。札幌としても、今後是非とも継続していきたい企画だ。私個人としては非常にイチ押しの企画である。もっともっと押して行かなくてはいけない。

【 in 札　幌 】

2016 年 9 月 20 日(火) ～ 9 月 25 日(日)　　**会　場：レッドベリースタジオ**

【 in 東　京 】

2016 年 9 月 27 日(火) ～ 10 月 2 日(日)　**会　場：芸能花伝舎**

ブレインストーミングの流れ（札幌・東京共通） 現実と舞台を繋げるには？

■ 9 月 20 日（火） 19：30 ～ 22：30 会場 レッドベリースタジオ
■ 9 月 27 日（火） 19：00 ～ 22：00 会場 芸能花伝舎
1 日目「お互いを知ろう！」

招聘講師であるフィリップに、上演プランの発表と、少し長めの自己紹介をしていただき、マカオでの彼らの活動、現地の演劇事情を紹介する。（80 分）
その後、参加者の上演プランの発表。上演プランのコンセプトを主に話す。また、ブレインストーミングの進め方について話し合う。（100 分）

■ 9 月 21 日（水） 19：30 ～ 22：30 会場 レッドベリースタジオ
■ 9 月 28 日（水） 19：00 ～ 22：00 会場 芸能花伝舎
2 日目「事件を語る！」

チームに分かれ、各チーム内で参加者の上演プランや元になる事件について語り、質疑応答を行う。自らが持ち込んだ事件をどこまで説明することができるのか、また他の参加者からはどのように思われ るのか。各上演プランについて議論することで、互いを知ると同時に、伝達力を磨く。（120 分）
チームごとにどのような話がなされたかを他チームに発表し、全体で共有する。（60 分）

■ 9 月 22 日（木・祝） 19：30 ～ 22：30 会場 レッドベリースタジオ
＜ゲスト講師 北村清彦氏（北海道大学教授）＞
■ 9 月 29 日（木） 19：00 ～ 22：00 会場 芸能花伝舎
＜ゲスト講師 森 達也（映画監督・作家・明治大学特任教授）＞
3 日目「事件との関わり方」

実際に起きた「事件」には、多かれ少なかれ＜当事者＞がいる。「事件」を扱うとき、当事者に対する配慮はどこまで必要になるのだろうか。また、「事件」を扱うことこそが、「事件」となり、<当事者> になることがある。どのように「事件」と関わって いくのか。ゲスト講師（in 札幌 北村清彦氏／in 東京 森達也氏）を招き、別の視点から話し合う。

北村清彦（北海道大学 教授(大学院文学研究科・思想文化学・芸術学)）
ポール・リクールの哲学に基づきながら、現代の多様な芸術現象の理解可能性を明らかにするとともに、環境と芸術との関係について考察する。また近年はイサム・ノグチの父、詩人ヨネ・ノグチの思想の解明に取り組んでいる。

森 達也（映画監督・作家・明治大学特任教授(メディア・リテラシー、ジャーナリズム論)）
1980 年代前半からテレビ・ディレクターとして、主に報道とドキュメンタリーのジャンルで活動する。1998 年にオウム真理教を被写体としたドキュメンタリー映画『A』を公開。ベルリンなど世界各国の国際映画祭に招待され、高い評価を得る。最近の作品にドキュメンタリー映画『311』『FAKE』がある。

■ 9 月 23 日（金） 19：30 ～ 22：30 会場 レッドベリースタジオ
■ 9 月 30 日（金） 19：00 ～ 22：00 会場 芸能花伝舎
4 日目「もっと事件を語る！」

新しくチーム分けをする。二日目のグループディスカッションを 受けて、各自が再度練り直した上演プランをプレゼンし、意見交換を行う。新たな視点を加えることで、議論をより深めていく。

■ 9 月 24 日（土） 19：30 ～ 22：30 会場 レッドベリースタジオ
■ 10 月 1 日（土） 18：00 ～ 22：00 会場 芸能花伝舎
5 日目「どの事件を扱うか」

六日目の発表会に向け、どの事件を扱うかチーム分けをして決める。（30 分）
チームごとに話し合い、内容、形式、役割等を決め、ミーティングや稽古を行う。（120 分）
どのようなことを行うことになったのかチームごとに全体に説明し、共有する。（30 分）

■ 9 月 25 日（日） 14：00 ～ 20：00 会場 レッドベリースタジオ
■ 10 月 2 日（日） 14：00 ～ 20：00 会場 芸能花伝舎
6 日目「作品を発表する」

14：00 ～ 17：00 ミーティングや稽古を行う。
17：00 ～ 19：00 発 表
チームごとに作品、またはプロセスを発表し、他チームを含めた相互批評を行う。作品の発表とは、多くの人に共有させることができるかということであり、成果発表という意味ではない。もちろん、作品という形にならなくても構わない。
19：00 ～ 20：00 片付けと帰りの会
協力して片付けた後で、気楽な雰囲気で語り合う。言いたいことを言える最後の場。

◆ 講師プロフィール ◆

フィリップ・チャン / 陳飛歴 Philip Chan

葛多芸術会「 Godot art association 」芸術監督、マカオ文化センター専属契約演出家、作家、俳優。北京中央戯劇学院演出専攻。北京国際青年演劇祭に選ばれたマカオ初の演出家。戯曲「生きの葬儀」は 2006 年にマカオ文学賞の脚本賞受賞。アビニョン、エジンバラ、台北、メルボルンなどの演劇祭にも参加。マイケル・フレインや、マーティン・マクドナーなどの現代戯曲から、政治性高いパフォーマンス作品まで幅広い演出を手がける。

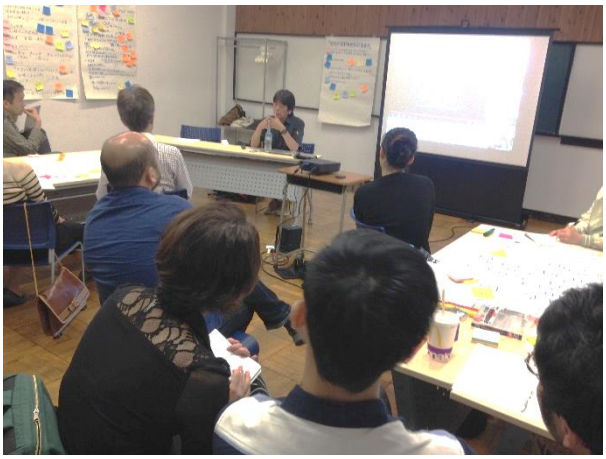
1 日目　2016 年 9 月 20 日（火）19：30 ～ 22：30　会場：レッドベリースタジオ（札幌）

2016 年 9 月 27 日（火）19：00 ～ 22：00　会場：芸能花伝舎（東京）

「お互いを知ろう！」

進行役から、参加者に概要説明。

1. このマカオ特集は「演出家同士が話し合うブレインストーミング型ワークショップである」
2. 特長は「既存戯曲の解釈分析ではなく、実在の事件を演劇として創作する」形式。
3. 最終日には、各自の創作プランの中から 2 つほどに絞り、成果発表をする。
4. その過程で、お互いにより交流を深め、国際交流プロジェクトの契機としたい。
5. 「互いの着眼点を面白がる力」、「他者に伝達、シェアする力」、「想像力」を大事に。
6. 可能な限り、参加者の意向は組んでいくが、時間制限の中で進行をせざるを得ないこと。



〇フィリップ

　これから私の活動紹介をしていこうと思いますが、その過程でマカオの演劇事情などについても、お話しできると思います。私は北京の中央戯劇学院の演出コースを修了しました。私は葛多芸術會という劇団を主宰しています。（映像を見せながら）最初に紹介する演出作品は、『決定性』という芝居です。これは両性具有者に関するものです。2 つ目は『金龍』というもので、これはドイツの作品で、100 回以上の上演をしています。3 つ目はアメリカの作品で、これは北京の劇場の委託で作りました。

　続いて自分の劇団「葛多芸術會」についての話をします。2006 年に劇団を設立しましたが、当時マカオでは演劇やダンス、音楽などのパフォーマンスが、年間 17 本ほどしか上演されていませんでした。2006 年時点で専門的な演出家の教育を受けていた人は 3 人しかいませんでした。10 年たった 2016 年現在、演劇だけで 97 本も上演されています。専門的な教育を受けた演出家は 200 人を超えました。

（映像を見せつつ）これらは私の劇団での演出作品で、すべて小劇場の上演です。これは有名なピローマン（マーティン・マクドナー作）です。すべてマカオの文化センターからの助成金でやっています。

これはロシアの脚本で、「自選題」です。（自分で選んだタイトルという意味）秀才な女学生が、卒論で「ロシア全土でカンニングが行われている」ということを告発しようとするが、親や先生がそうさせないように圧力をかけるという芝居です。当時のマカオでは汚職政治が蔓延していたので、この上演で世相を風刺しました。

私が劇団創立したばかりの 2006 年当時はカジノが 1 軒しかなく、マカオ政府はお金がなかったのですが、今はカジノも多くなり、収益はラスベガスを超えるようになりました。劇団への助成金も日本円で 10～20 万円でしたが、今は数百～数千万円ももらえるようになってきました。

そうやって助成金を出してくれるということは、自分のような若手演劇人を育てていくことにもなるが、同時に社会の変動も大きいので、それは芸術にとって非常に良いテーマ、題材になっています。

幾つかの例を挙げてみたいと思います。最初は 2008 年のものです。

当時の社会背景というと、マカオ政府はカジノによる税収が増え、その使い道として、一人当たりに 3～4 万円を給付することにした。マカオ政府は汚職にまみれていたが、市民にはお金をばらまき、不平を押さえつけようとした。ちなみにこの給付は増え、現在は 10 万円になっている。翻って我々アーティストも、政府からの助成金をもらって創作をしているという側面もあるのですが。

（上演映像を見せながら）『5 人のアホ、マカオに立つ』という作品の最後の場面です。給付金ばらまき問題に関する研究者の批判論文を言いながら、「冷静になって考えてみる」と言いだし、違和感のある動きをする。すると、空から降ってくるお金。「お金なんかいらない」といいながら、お金を楽しそうに拾う。そこに流れる音楽もオリジナルで、政府のばらまき政策に関する想いを歌詞にしています。

社会問題を扱った芝居として次に紹介するのは 2006 年。マカオにカジノが乱立しだした時代に作りました。そのころ、カジノを題材にした芝居は他にもたくさんあったのですが、それらは既にマカオで名を成した演出家の作品であり、頭でっかちでカジノに対して批判的な態度の作品でした。しかし、自分はカジノで 2 年間働いていた経験があるため、それらの先行作品に対して違和感を感じていました。なので、この時には自分の視点から見えるカジノを描こうと作品を作りました。

もう一つ、別の作品例を挙げます。マカオで、中国本土からパンダを 2 匹迎え入れるために、300 億ほどを投資しパンダ施設を作ったことがありました。しかし、実際の当時のマカオでは、無職の人も多

く、スラム街ではホームレスもたくさんいた。そのスラム街で芝居をした。俳優たちは「来世にはパンダになりたいな」というセリフを言わせたりして、政治批判をしました。

最後に、マカオの国会である法律が成立した。「政治家は、退職後にも現職時の給料の 7 割を保証される」というもので、それに呼応する形で、作った作品の映像です。2012 年の作品ですが、当時自分は「芝居の力で人々に影響を与えていきたい」と思っていましたが、結局は若い世代が選挙に行かないから、そういう政治がはびこるのだと考えて、この作品は若い世代に訴えるものにしました。当時、日本のアニメ『進撃の巨人』がマカオで流行っていたので、それをパロディにした。（映像を見る。『進撃の巨人』オープニング映像を編集して使っている映像。巨人が、マカオの実際の政治家だったりと、アニメの世界観とマカオの現実を重ねた造り。若い観客は爆笑しながら見ている模様） 映像の中に、Facebook のロゴや、「いいね」マークが出てきていたのは、当時若者たちは SNS で政治批判はするけれど、実際の投票にはいかないという現実を風刺してあります。

もう一つ同じように 2013 年に作ったもので、『半沢直樹』のバージョンもあり、これがまたとてもくだらないので、是非お見せしたいです。俳優のセリフは、ドラマ通り（日本語）ですが、字幕はマカオの政治批判について、語られています。（映像を見る。日本オリジナル版をベースに使用した映像。そこに半沢役だけ中国人を加え、編集している。カット割りがうまく、北大路欣也などの名優と中国人の半沢が共演しているように見え、観客は笑っている。）これは半沢直樹がマカオ政府の汚職を調査に行くという設定です。2013 年当時、半沢直樹が非常に流行していたので、是非にもパロディに使うべきと作りました。

＊上演プランのプレゼンタイム

以上の活動紹介の後、各自の上演プランのプレゼンタイム 10 分へと入る。

扱われた事件例（東京）

「コリヤー邸事件」

1947 年、ニューヨークのハーレムにあるコリヤー邸にて起きた事件。コリヤー邸に住む兄弟は外部との接触を極端に嫌い、侵入者を防ぐために、家を彼らが蒐集した廃棄物で埋め尽くし、引きこもって生活していた。ある時、近隣住民の「最近、家にいる気配がない」という通報で、警察が廃棄物をどかしながら邸内に。侵入者用の罠まで用意してあった邸内を捜索の結果、兄弟の遺体が見つかる。弟は侵入者用の落とし穴に自らがはまり死亡。寝たきり状態だった兄は、世話をしてくれる弟が死んだことから、餓死していた。

「相模原障碍者施設津久井やまゆり園事件」

2016 年 7 月 26 日未明に神奈川県相模原市にある障害者福祉施設で発生した殺傷事件。犯人は施設職員を拘束し、障碍者のみを刃物で殺傷した。同日中に 19 人の死亡が確認され、26 人が重軽傷を負っている 。後に自首した犯人 A は同施設の元職員であり、犯行前に衆議院議長に対し「重度障碍者は社会的な負担であり、これを取り除くことが多くの人の幸福になる。私の計画は意義あるものなので、無罪にしてほしい」という趣旨の声明文を送りつけていた。

「UBER へのマカオ政府の規制」

UBER とは、世界的に普及しているスマホによる個人タクシー配車システムである。登録している人はスマホアプリを通じ、近くを走る UBER 登録の個人タクシーを検索し利用できる。利用者にと

っては、一般のタクシーより割安という利点が、労働者にとっても、だれでも個人タクシーを始められる手軽さもあり、瞬く間に普及。しかし、既存のタクシー会社組合は打撃を受けたため、当時のマカオ政府は UBER を違法とし規制したため、UBER はマカオから撤退した。

このほかにも、奈良県月ヶ瀬村女子中学生殺人事件、佐世保女子高生同級生殺害事件、京都伏見区介護殺人事件、東大ポポロ事件などが提示された。

それら事件から見えてきたテーマは、モノへの執着、格差や差別、同調圧力、愛を実感できない若者、社会的弱者をどう受け入れるか、高齢化社会による介護問題、アニメと現実の境界など、かなり多岐に及び、現代を象徴しているものだった。また、多くの参加者がその事件に対し、自分自　身と事件の当事者との共通点を見出しながら語っていることで、事件の表面的な部分ではない深層に肉薄した結果、参加者全員がある切実さを共有した。上演プランを説明する時間は1 人につきたった 10 分であったが、自己紹介をせずとも、事件を選んだ動機などから、人間性が透けて見えてくるのも、面白い発見であった。

参加者全員のプレゼン終了後、今後の進め方について意見交換を行い、初日は終了となった。

扱われた事件例（札幌）

「七飯町男児失踪事件」

2016年5月28日夕方、北海道北斗市の小学2年生男児を「しつけ」のためにという意味で両親が山中で運転する車から降ろし、その後の行方がわからなくなった事件。道警や消防、自衛隊らを含む200人以上で6日間に渡って捜索を行い、6月3日7時30分頃、行方不明になった場所から約5キロほど離れた演習場の宿泊施設にいるのを、雨宿りに入った演習中の自衛隊員らが発見した。男児は、それまでの間、ほぼ水しか飲んでいなかったようで、すぐさま病院に搬送された。男児に大きな怪我はなく、軽度の脱水と低体温状態にあったという。

「苫小牧幼児置き去り餓死事件」

北海道苫小牧市に住む女性（当時 21 歳）が
2006 年 10 月頃から自身の長男（当時 3 歳）と三男（当時 1 歳）を自宅に約 1 ヶ月の間放置、三男を餓死させ、その遺体を交際相手の男性宅の物置に隠した。2007 年 2 月 20 日、三男の行方が分からないことを不審に思った児童相談所の通報により発覚。2007 年 12 月に 1 審で殺人と死体遺棄、保護責任者遺棄の罪で懲役 15 年の判決を受けた。女性は「楽しい生活がしたかった。もう面倒を見たくない、2 人とも殺してしまえと思った」と供述していた。

「小樽ドリームビーチひき逃げ事件」

2014 年 7 月 13 日、北海道小樽市銭函の海水浴場「おたるドリームビーチ」近くの市道で、女性 4 人がひき逃げされ 3 人が死亡、1 人が首の骨を折る重傷となった。犯人の男性は、その後救急に連絡もせず、車を運転し続けてコンビニにタバコを買いに行き、連絡を取った友人に勧められ、警察に通報した。男性は 12 時間前から飲酒をしており、

基準値の 3 倍以上のアルコールが検出された。また、運転時には時速 100km を超えていたといい携帯電話で話をしながらだったという。女性らは道の端を歩いていたにも関わらず、後ろから追突された。犯人は危険運転致死傷罪として懲役 22 年が求刑された。

他に相模原障害者施設津久井やまゆり園事件のような、当時話題となっていた事件や、東大安田講堂事件、賄征伐といった昭和・明治の事件のほか、精神疾患のために参加者の母が失踪したという身の回りで起きた事件も取り上げられていた。

2日目　2016年9月21日（水）19：30 ～ 22：30　会場：レッドベリースタジオ（札幌）

2016年9月28日（水）19：00 ～ 22：00　会場：芸能花伝舎（東京）

「 事件を語る！」

1. 上演プランを模造紙に書く

　まず、1 人につき、大きな模造紙 1 枚が配られ、「その模造紙に他者を巻き込めるようにあなたの上演プランを記載してください」という課題が与えられた。各自、10 分の制限時間で、「タイトル」、「テーマ」、「上演スタイル」、「展開」、「使用するセリフ」などを記載していく。

2. ほかの参加者の意見を貰う

　その後、グループに分かれ、各プランナーが「他の参加者に意見を貰いたいポイント」を提示し、それに対し、他の参加者はリアクションを付箋で模造紙に貼っていく。

ポイント提示例

「観客がこの事件を追体験できる面白いアイデアがほしい」「この作品にタイトルをつけるとしたら、どんなものがいいか？」、「この犯人の行為（≒事件）に対し、あなたは是か非か？ また、その理由を？」、「どんな様式の上演スタイルがいいか？」など。

3. グループに分かれ、議論する

　次に、改めて自らの上演プランに対し、各グループでディスカッションを 15 分ほど行う。プランナーの上演プランの説明に加え、各自の意見交換を行っていく。出てきた意見は付箋に書き、どんどん模造紙に貼られていく。

　この 15 分間の進行も各プランナー演出家に任されているため、タイムマネジメント力、議論の整理力、意見の引き出し方、グループへ共有する力などが必要になる。と同時に、他の参加者も短時間でプランナーの意図を理解し、応答する力も必要になった。たった 15 分ではあるが、演出家同士の意見交換は視点が豊かな上、各自が能動的に議論に加わわるため、思いもよらない刺激的な意見アイデアが多く出てきた。だが、いくら作品に抱く思いは強くとも、言語力や表現力が不足していたり、論点を明確化できていないと、議論は活発化せず、必ずしも効果的な 15 分にはならないケースもある。まさに演出家の伝達力、マネジメント力が問われた。

意見が活性化したコツの幾つかを紹介すると、

A 問いかけを重視する

自分が一方的に説明するだけではなく、具体的な問いかけをすることで、意見を引き出すと同時に、各自の理解度を確認する。また、意見表明をしてもらうことで、双方向の関係が生まれる。

B 要点を明確にする

全ての説明をするべく早口になってしまうと、伝わる情報が並列化し、理解度は浅くなる。ポイントを要約できると、短時間で共有できるうえ、焦点がクリアーになり、議論がスムーズに進む。

C ユーモアを大事にする

一見、論点が外れるように思うが、思考の方向性が広がるうえ、リラックスすることで停滞した空気を変え、意外なアイデアに繋がることもあった。

最後に、2 分間で各プランについて話された内容を、全体に発表することに。ただし発表者はプランナーではなく、議論に参加した「他の参加者」にしてもらった。このことで「自らのプランが参加者に理解されたか？」の確認も行うと同時に、演出プランを客観的に見つめることにも繋がった。

3日目　2016 年 9 月 22 日（木・祝）19：30 ～ 22：30　会場：レッドベリースタジオ（札幌）

2016 年 9 月 29 日（木）　19：00 ～ 22：00　会場：芸能花伝舎（東京）

「 事件との関わり方」

「事件を演劇化するにあたり、当事者の視点をもって掘り下げよう」という目的で、ゲストにドキュメンタリー映画監督の森達也氏のレクチャーを。また、ベルギーの劇団グルポフの『ルワンダ 94』と、デンマークの『マニフェスト 2083』の映像を見る。その後、ブレインストーミングに移るというプログラム。

◆ 東京ゲスト講師：森 達也（映画監督、作家、明治大学特任教授）

1998 年にオウム真理教を被写体にしたドキュメンタリー映画『A』を監督。ベルリンなど、数多くの国際映画祭に招待される。近作には佐村河内守氏を被写体にした『FAKE』がある。

・森氏レクチャーの要約抜粋

「事件とメディアの関係」

事件はメディアが作りだしている側面がある。日本は治安がいいので事件自体が少ないが、メディアはニュースにするため、過剰に報道する傾向がある。また、実名報道の頻度も高い。推定無罪の原作があるが、容疑者段階でも実名で写真を出し、またメディアは容疑者の生活や過去に触れ、プライベートを暴露する。これら度を越した過熱化はメディアの競争があるから。

「メディアの報道姿勢」

メディアは権力監視も重要な目的。であるが、日本のメディアは警察や権力者からもらった情報ソースを報道するという傾向のため、その役割が薄い。また、偏向報道も多い。オウム真理教のときもそうだったが、起こった事件の特異性を強調し、視聴者を煽ることで興味をひこうとする。その結果、犯人を理解不能なモンスターとしてしまい、事件の本質を見えなくさせてしまう。「その事件の原因と結果」を普遍的に探ることが、報道においては大事である。

「社会の要求に応えすぎるメディア」

オウムの事件当時、取材した彼らは善良で誠実であったが、大多数のメディアとしてはその実像は見せたくなかった。「残虐な事件を起こした宗教集団」というイメージを崩す報道は、当時の社会や視聴者が求めていなかったからである。メディアは大衆意識に左右されず、フラットな姿勢でなくてはいけない。

「普通の感覚で接する」

オウムに取材ができたのは、自分が普通に取材の申込をしたから。ある意味鈍感だった。何故ならメディアは「カルト」を特別視し過ぎて、きちんとした取材の申込をしていなかった。遠巻きに眺め、隠し撮りするだけで、彼らの中に入って実態を知ろうとしなかった。特異性をあおることで、理解不能なものと分別したかった。時勢や空気に振り回されず、普通の感覚で「人間」として接することが大事。

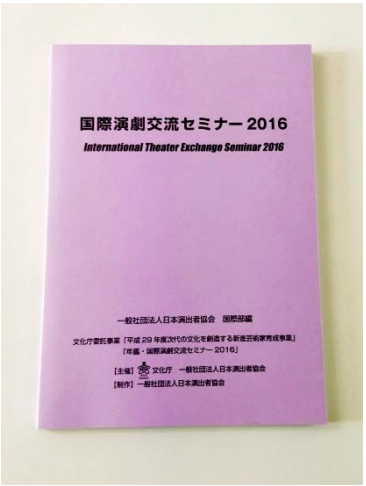
「報道を鵜呑みにしてはいけない」

本来、事件というのは多面的なものであり、複雑なものだ。しかし、報道されている情報は最も、わかりやすく、刺激的で、視聴者が喜ぶ部分を切り取っている。事件を理解するときには報道されていない部分を想像する力を持つべきだ。真実は 1 つであり、それは神しか知らない。だからこそ、己の想像力を駆使し、真実を探り、事件を捉えるべきだ。

続き、詳細は、国際演劇交流セミナー2016年鑑にて

国際演劇交流セミナー2016

――― 年 鑑 ―――



■ 目　次　Index ■

メキシコ　特集 – リーディング・レクチャー・シンポジウム ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
アフガニスタン特集 – ワークショップ・リーディング ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
韓　　国　特集 – ワークショップ・レクチャー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77
マカオ　特集 – ワークショップ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 113
ウェールズ　特集 – ワークショップ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 135
イギリス　特集 – ワークショップ・レクチャー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 153
国際演劇交流セミナー実施年表【1999 年～2016 年】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 214

■ ご希望の方は、日本演出者協会 事務局までご連絡ください。

TEL:　03-5909-3074 ／FAX:　03-5909-3075

E-mail:　j_d_a_info@yahoo.co.jp